表１　子ども家庭総合評価票による虐待ケースの特徴（１）：乳児期版（0～2 歳）
＜乳児版（虐待:63 ケース、非虐待:52 ケース＞

	虐待ケース(SD)		非虐待ケース(SD)		*t*値
不自然なあざや傷あり	1.40	(0.79)	1.02	(0.15)	3.22 **
養育者に笑顔を見せない	1.22	(0.63)	1.00	(0.00)	2.57 *
あやしても喜ばない	1.28	(0.74)	1.00	(0.00)	2.77 *
知らんふりをする	1.26	(0.62)	1.02	(0.15)	2.70 *
抱っこされると喜ぶ	3.22	(0.93)	3.63	(0.85)	-2.20 *
健診での問題の指摘	1.31	(0.47)	1.08	(0.27)	2.98 **
子への親の丁寧な応答	2.50	(1.02)	3.03	(1.08)	-2.15 *
子への無視・拒否	2.07	(1.09)	1.56	(0.91)	2.13 *
近隣トラブル	2.07	(1.14)	1.20	(0.63)	2.39 *

*: $p < .05$;　** : $p < .01$

表２　子ども家庭総合評価票による虐待ケースの特徴（２）：幼児期版（3～6 歳）
＜幼児版（虐待:58 ケース、非虐待:55 ケース＞

	虐待ケース(SD)	非虐待ケース(SD)	*t*値
不自然なあざや傷あり	1.38 (0.82)	1.04 (0.20)	2.95 **
養育者を警戒	1.79 (0.95)	1.41 (0.79)	2.22 *
養育者を頼りに戻ってくる	2.94 (1.09)	3.40 (0.80)	-2.38 *
抱っこされると喜ぶ	3.18 (0.99)	3.55 (0.77)	-1.91 †
主たる養育者との愛着不全傾向	2.02 (0.91)	1.60 (0.74)	2.53 *
きょうだい葛藤	2.19 (1.14)	1.57 (0.94)	2.24 *
家族の相互援助	2.15 (0.99)	2.77 (1.09)	-2.44 *
清潔の管理不全傾向	2.00 (1.18)	1.54 (0.91)	2.05 *
栄養管理の不全傾向	2.53 (1.28)	1.77 (1.07)	3.02 **

	虐待ケース(SD)	非虐待ケース(SD)	*t*値
しつけの重要性への認識欠如	2.30 (1.23)	1.61 (0.84)	3.05 **
子どもをやさしくなぐさめる	2.53 (1.08)	3.18 (0.87)	-3.07 **
子どもの気持ちを察する	2.51 (1.06)	3.00 (0.89)	-2.37 *
子どもへの丁寧な応答	2.34 (1.08)	2.85 (0.94)	-2.39 *
乱暴な扱い	2.02 (1.12)	1.52 (0.80)	2.36 *
脅す・侮辱的な言葉をかける	2.00 (1.15)	1.40 (0.74)	2.83 *
近隣からの孤立	3.50 (0.76)	2.83 (1.03)	2.66 *
文化的環境の欠如	2.95 (0.49)	2.53 (0.51)	2.73 *

+: $p < .10$; 5　*: $p < .05$;　** : $p < .01$

表３　子ども家庭総合評価票による虐待ケースの特徴（３）：児童期版（小学 1～4 年生）
＜児童期版（虐待：71 ケース、非虐待：46 ケース＞

	虐待ケース(SD)		非虐待ケース(SD)		*t*値	
不自然なあざや傷あり	1.41	(0.74)	1.13	(0.41)	2.50	*
身体疾患の治療度	2.43	(0.88)	2.85	(0.49)	-2.28	*
養育者を警戒	2.21	(1.03)	1.45	(0.77)	4.37	**
他者への極端ななつき方	2.56	(0.92)	2.00	(0.88)	3.25	**
かんしゃくを起こす	2.96	(0.67)	2.70	(0.84)	1.76	†
気が散りやすい	2.93	(0.94)	2.60	(0.89)	1.87	†
落ち着きがない	2.84	(0.96)	2.46	(1.03)	2.07	*
多動傾向	2.69	(0.91)	2.36	(0.91)	1.90	†

	虐待ケース(SD)		非虐待ケース(SD)		*t*値	
養育者のことを信頼	2.80	(1.06)	3.23	(0.65)	-2.52	*
養育者から信頼されている	2.52	(1.11)	3.00	(0.77)	-2.39	*
養育者はわかってくれる	2.37	(1.01)	2.89	(0.76)	-2.79	**
主たる養育者との愛着不全傾向	2.14	(0.97)	1.67	(0.66)	2.66	**

表４　子ども家庭総合評価票による虐待ケースの特徴（4）：思春期版（小学 5 年生～中学 3 年生）
＜児童期版（虐待：80 ケース、非虐待：102 ケース＞

	虐待ケース(SD)		非虐待ケース(SD)		*t*値	
不自然なあざや傷あり	1.40	(0.76)	1.13	(0.40)	2.66	**
精神疾患への罹患	1.83	(1.19)	1.40	(0.91)	2.37	*
注意散漫傾向	2.58	(0.95)	2.28	(0.97)	2.09	*
規則正しい登校	1.54	(0.85)	1.97	(1.18)	-2.84	**
養育者のことを信頼	2.20	(1.03)	2.54	(0.92)	-2.30	*
養育者から信頼されている	2.04	(0.89)	2.30	(0.99)	-1.70	†
養育者はわかってくれる	1.97	(0.94)	2.29	(0.88)	-2.20	*
教師を頼る	2.51	(0.96)	2.13	(0.97)	2.53	*
教師の言うことをきく	2.75	(0.93)	2.45	(0.98)	2.05	*
教師のことが好き	2.69	(0.93)	2.40	(0.99)	1.84	†
悪いことへの予期不安	2.47	(0.97)	2.20	(0.89)	1.89	†

	虐待ケース(SD)		非虐待ケース(SD)		*t*値	
家族の相互援助	1.80	(0.86)	2.34	(0.91)	-3.45	**
家庭はほっとできる	1.45	(0.75)	2.28	(0.97)	-5.42	**
主たる養育者の家庭軽視傾向	2.53	(1.07)	2.09	(1.00)	2.35	*
家族の問題への取り組みの弱さ	3.33	(0.86)	2.88	(0.99)	2.92	**
清潔管理	2.15	(1.16)	1.65	(0.91)	2.92	**
子どもをやさしくなぐさめている	1.98	(1.10)	2.47	(0.89)	-2.85	**
気持ちを察する	2.02	(1.09)	2.47	(0.87)	-2.79	**
ていねいな応答	1.86	(1.01)	2.20	(0.84)	-2.20	*
口をはさむ	2.64	(1.04)	2.34	(0.95)	1.76	†
自由を束縛	2.57	(1.13)	2.15	(0.91)	2.32	*
コントロールする	2.45	(1.08)	2.05	(0.88)	2.31	*
乱暴な扱い	2.33	(1.31)	1.65	(0.90)	3.59	**
無視・拒否	2.68	(1.13)	1.85	(0.93)	4.90	**
脅す・侮辱的な言葉をかける	2.66	(1.17)	1.96	(1.03)	3.79	**
近隣からの孤立	3.55	(0.70)	3.07	(0.80)	3.35	**
学級は静かで落ち着ける	2.86	(0.98)	2.41	(0.94)	2.52	*

表 5　子ども家庭総合評価票による虐待ケースの特徴（5）：思春期版（中学卒業～18 歳）
＜児童期版（虐待：52 ケース、非虐待：77 ケース＞

	虐待ケース(SD)	非虐待ケース(SD)	*t*値
食欲不振	1.94 (0.93)	1.56 (0.74)	2.529 *
養育者のことを信頼している	2.14 (1.15)	2.51 (1.13)	-1.787 †
養育者はわかってくれる	1.78 (1.12)	2.18 (1.12)	-1.977 *
家族の相互援助	1.20 (1.02)	1.66 (1.26)	-2.214 *
子どもをやさしくなぐさめている	1.60 (1.12)	2.11 (1.31)	-2.235 *
気持ちを察する	1.76 (1.06)	2.22 (1.25)	-2.16 *
ていねいな応答	1.64 (1.03)	2.05 (1.30)	-1.895 †
自由を束縛	2.25 (1.40)	1.52 (1.07)	3.175 **
コントロールする	2.20 (1.38)	1.43 (1.08)	3.325 **
脅す・侮辱的な言葉をかける	2.00 (1.48)	1.47 (1.11)	2.137 *
養育者の教師からの信頼	1.35 (1.44)	1.89 (1.60)	-1.719 †
養育者の教師への信頼	1.49 (1.53)	2.32 (1.53)	-2.703 **

** $p<.01$; * $p<.05$; † $p<.1$

厚生労働科学研究費補助金
総合研究報告書

要保護の児童の被虐待経験と非行経験および交友関係との関連

ー 子ども家庭総合評価票による児童福祉機関調査からー

○酒井 厚[1]・菅原ますみ[2]・伊藤教子[3]・松本聡子[2]
([1]山梨大学・[2]お茶の水女子大学・[3]明星大学)

Key words: 養育環境の評価、要保護児童、児童虐待

目 的

本研究は、児童福祉機関を訪れる要保護の子ども（0～18歳未満）の発達保障に関する、科学的かつエビデンス・ベースドなアプローチを可能にするために開発された発達の状況と環境要因に関する多側面評価票（“子ども家庭総合評価票”, 菅原, 2005）の作成に関する大規模調査によるものである。とくに今回は、児童自立支援施設と児童養護施設にいる中学生を対象に、対人関係や問題行動に関する調査を行った中から、彼らの被虐待経験や非行経験と友人および親友関係との関連について検討した。

方 法

1）調査対象者

全国の児童自立支援施設および児童養護施設に「中学生の発達と行動に関する調査票」を配布した。全58自立支援施設のうち44箇所（71%）、全141養護施設のうち92箇所（65%）からの回収が可能となり、施設職員947名の施設職員（延べ人数）および1021名（男子611名・女子410名）の中学生から回答を得た。

2）質問内容

①子どもの非行経験・被虐待経験

施設職員が、担当する中学生のこれまでの被虐待経験（身体的虐待・心理的虐待・ネグレクト・性的虐待・DV[夫婦間の暴力]の目的や巻き添え）と非行経験（補導対象から重犯罪まで）について回答した。また、非行経験に関しては、それが集団非行であるか単独非行であるかを尋ねた。

②子どもの学校内外の友人関係および親友関係

子ども自身が、学校内外における友人および親友の有無とその人数について回答した。また、学校内外を含めて最も親しい親友一人との関係の質を評価するためにFriendship Quality Questionnaire (FQQ; Parker, et al., 1994)の日本語短縮版尺度（表1）を使用した。

	F1	F2	F3	F4
Factor1：相談				
○○さんと私はお互いの秘密を打ち明けあう	.86			
○○さんと私はおたがいに悩みを相談しあう	.75			
腹が立つようなことがあったときは、○○さんに話す	.72			
Factor2：相互尊重				
○○さんは私の気持ちを大切にしてくれる		.75		
○○さんは私の気持ちを傷つけたときには"ごめんね"とあやまる		.68		
○○さんと私はお互いを大切で特別な存在だと感じている		.64		
Factor3：けんか				
○○さんと私はよくけんかする			.90	
○○さんと私はよく口げんかする			.69	
○○さんはときどき私の悪口を他の子にいう			.50	
Factor4：時間共有				
○○さんと私はいつも休み時間に一緒に遊ぶ				.52
○○さんと私は一緒に楽しいことをして過ごすことが多い				.99
○○さんと私はおたがいの部屋や家を行き来する				.34
初期の説明率	36.21%	16.24%	8.43%	7.92%
α係数	.85	.83	.76	.70

表1 FQQ日本語短縮版の因子分析結果

結 果

（1）FQQの因子分析

本研究で使用したFQQ尺度の因子分析（主因子法・Promax回転）を行い、オリジナル版の下位尺度に相当する4因子を抽出した（表1）。各下位尺度は3項目（5件法）で構成され、親友との「相談」、「相互尊重」、「けんか」、「時間共有」の程度を表す項目群でまとめられた。

（2）子どもの被虐待経験と非行経験に関する検討

本研究の調査対象者のうち被虐待経験があるのは、男子が全体の12.2%（125名）、女子が9.4%（96名）であった。また、集団非行経験者では男子が10.1%（103名）、女子が5.8%（59名）、単独非行経験者は男子が12.6%（129名）、女子が6.0%（61名）であった。このうち、単独非行経験に関しては、男子の方が女子に比べて有意に多かった（χ^2=6.30, p<.01）。つぎに、被虐待経験の有無と非行経験の有無との関連について男女ごとに検討したところ、男子に関して、被虐待経験のある子どもの方がない子どもに比べて集団非行経験の出現率が少ないことが示された（χ^2=7.28, p<.01）。

（3）子どもの被虐待経験と友人・親友関係

子どもの被虐待経験の有無と、学校内外の友人・親友の数および最も親しい親友関係の質との関連について男女ごとに検討した。結果として、被虐待経験の有無は、学校内外の友人や親友の数の差と関連はなかったが、男子に関して、非虐待経験のある子どもの方がない子どもに比べて親友との「相互尊重」の得点が有意に低いことが示された（t=1.98, p<.05）。

（4）子どもの非行経験と友人・親友関係

つぎに、子どもの単独・集団非行経験の有無と学校内外の友人・親友の数および最も親しい親友関係の質との関連について男女ごとに検討した。単独非行と集団非行の両者に共通して、非行経験の有無は学校内外の友人や親友の数の差と関連はなかった。しかし、単独非行経験のある男子は、未経験者よりも親友との「相互尊重」得点が有意に高いことがわかった（t=2.17, p<.05）。また、集団非行経験のある男子は未経験者に比べて親友への「相談（t=3.24, p<.01）」、「けんか（t=2.08, p<.05）」、「時間共有（t=3.39, p<.01）」の得点が有意に高く、集団非行経験のある女子が未経験の女子に比べて親友との「けんか（t=2.15, p<.05）」得点が有意に高いことが示された。

考 察

以上から、被虐待経験と非行経験の有無は、学校内外の友人や親友の数という量的側面ではなく、親友関係の質的側面の個人差に関わることがわかった。被虐待経験のある子どもは、経験のない子どもに比べて、自分が親友と思う個人のことも尊重することが難しく、親密な他者との間に良好な対人関係を形成するのが得意ではないことが伺える。

一方、集団非行経験のある男子については、経験のない男子よりも親友と時間を共にし、お互いの悩みを打ち明けあうなどの親密な関係を形成する。しかし同時に、集団非行経験のある子どもは親友とけんかすることも多く、葛藤が多く不安定な親友関係を形成する傾向にあるといえよう。それでは、こうした葛藤が多く不安定な関係性が形成される親友とはどのような存在であろうか。今回は、子どもの親友の非行経験の有無については検討していないが、集団非行経験のある個人が、非行行為集団の仲間の中に親友を求める可能性は十分に考えられよう。今後、親友に関してのより詳細な情報をもとに彼らの交友関係について検討していく必要があろう。

表 2 学校内外の友人・親友の人数とFQQ得点の平均とSD（子どものカテゴリー別）

			学校内の友人数	学校内の親友数	学校外の友人数	学校外の親友数	相談	相互尊重	けんか	時間共有
学校調査	小学生	男子	34.68(32.80)	7.82(10.57)	11.85(16.46)	4.46(8.88)	5.52(3.61)	8.17(2.90)	3.11(3.08)	7.99(2.82)
		女子	33.17(27.46)	5.71(8.10)	12.08(15.00)	3.38(5.51)	8.45(3.16)	8.99(2.77)	3.06(3.07)	8.57(2.71)
	中学生	男子	44.03(82.75)	9.38(60.42)	18.85(54.48)	4.63(17.48)	5.70(3.48)	6.98(2.82)	3.24(2.97)	7.04(3.00)
		女子	34.53(47.01)	3.97(10.94)	13.25(20.01)	1.56(2.29)	8.90(3.00)	8.68(2.65)	2.84(2.78)	8.01(2.62)
施設調査	小学生	男子	24.56(55.66)	5.09(9.27)	14.71(26.50)	5.20(14.20)	4.52(3.94)	7.36(3.57)	4.34(3.87)	7.36(3.62)
		女子	24.21(28.09)	5.42(8.62)	16.24(23.76)	4.71(10.50)	6.98(3.89)	8.13(3.72)	4.59(4.11)	7.35(3.22)
	中学生	男子	24.34(33.60)	7.03(24.84)	26.27(60.66)	5.95(23.96)	5.45(3.82)	6.83(3.17)	3.62(3.26)	7.16(3.42)
		女子	25.55(61.40)	6.06(50.60)	28.46(79.52)	3.48(8.70)	8.37(3.50)	8.26(2.99)	3.56(3.15)	7.79(3.20)
虐待なし	小学生	男子	26.55(64.46)	5.13(9.28)	15.98(30.91)	5.34(13.99)	4.54(3.65)	7.36(3.36)	3.98(3.54)	7.51(3.48)
		女子	27.16(29.98)	5.48(7.72)	18.41(25.34)	5.16(12.40)	6.83(3.81)	7.93(3.81)	4.53(4.08)	7.32(3.04)
	中学生	男子	24.60(27.63)	6.52(14.57)	25.46(42.54)	5.30(12.73)	5.55(3.83)	6.96(3.19)	3.61(3.25)	7.25(3.33)
		女子	28.28(69.41)	7.17(57.89)	30.66(85.92)	3.75(9.70)	8.41(3.52)	8.39(2.96)	3.48(3.12)	7.91(3.20)
虐待あり	小学生	男子	22.53(45.02)	5.05(9.28)	13.42(21.10)	5.06(14.44)	4.50(4.24)	7.36(3.78)	4.72(4.17)	7.20(3.76)
		女子	20.97(25.56)	5.34(9.52)	13.79(21.68)	4.24(8.03)	7.14(3.99)	8.34(3.63)	4.65(4.15)	7.38(3.42)
	中学生	男子	23.36(50.75)	9.05(47.12)	29.47(105.40)	8.48(46.84)	5.06(3.78)	6.33(3.04)	3.63(3.31)	6.82(3.76)
		女子	17.03(20.51)	2.48(4.88)	21.89(56.08)	2.62(3.92)	8.24(3.42)	7.82(3.07)	3.81(3.24)	7.39(3.19)
集団非行なし	中学生	男子	24.70(35.35)	7.34(26.77)	24.67(60.89)	6.07(25.84)	5.23(3.75)	6.73(3.08)	3.74(3.26)	6.95(3.40)
		女子	25.23(62.34)	6.81(54.63)	26.08(75.67)	3.70(9.34)	8.30(3.47)	8.27(2.96)	3.42(3.15)	7.66(3.13)
集団非行あり	中学生	男子	22.60(23.25)	5.52(11.58)	33.98(59.20)	5.37(11.49)	6.55(3.97)	7.32(3.55)	3.01(3.20)	8.19(3.38)
		女子	27.46(55.77)	1.53(1.90)	44.28(100.99)	2.21(2.52)	8.80(3.64)	8.20(3.19)	4.37(3.01)	8.54(3.54)

表 3＆表 4 子どもの友人・親友関係に関する分散分析結果

	主効果			交互作用		
	調査機関（学校or施設）	学年（小or中）	性別	機関×学年	機関×性別	学年×性別
学校内の友人数	○学校＞施設	×	×	×	×	×
学校内の親友数	×	×	○男＞女	×	×	×
学校外の友人数	○施設＞学校	○中＞小	×	○（図1）	×	×
学校外の親友数	○施設＞学校	×	○男＞女	×	×	○男増加，女減少
親友との相談	○学校＞施設	○中＞小	○女＞男	○（図2）	×	×
親友との相互尊重	○学校＞施設	○小＞中	○女＞男	○（図3）	×	○男減少，女平行
親友とのけんか	○施設＞学校	○小＞中	×	○（図4）	×	×
親友との時間共有	○学校＞施設	○小＞中	○女＞男	○（図5）	○施設男少，学校女多	○男減少，女平行

	主効果	交互作用	
	被虐待経験の有無（学校or施設虐待なしor施設虐待あり）	虐待×学年	虐待×性別
学校内の友人数	○学校＞虐待なし，学校＞虐待あり	×	×
学校内の親友数	×	×	×
学校外の友人数	○虐待なし＞学校，虐待なし＞虐待あり	○（図6）	×
学校外の親友数	○虐待なし＞学校，虐待あり＞学校	×	×
親友との相談	○学校＞虐待なし，学校＞虐待あり	○（図7）	×
親友との相互尊重	○学校＞虐待なし，学校＞虐待あり	○（図8）	×
親友とのけんか	○虐待あり＞虐待なし＞学校	○（図9）	×
親友との時間共有	○学校＞虐待あり	○（図10）	×

○がついているものはすべて 5%水準もしくは 1%水準で有意なもの。
3 次の交互作用はすべて有意でなかったため記述しなかった。

「学校外の友人数」に関する交互作用グラフ

図 1:調査機関×学年

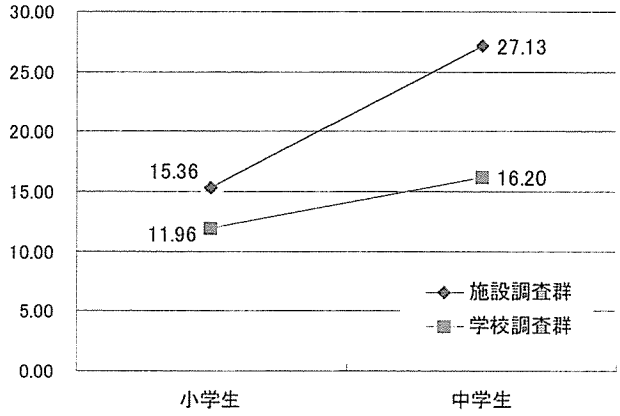
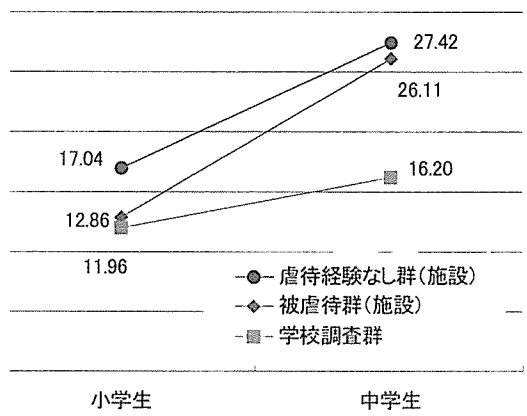


図 6:虐待経験有無×学年



学校外の友人数は、学校調査群よりも施設調査群の方に多く、中学生になるとその差はさらに広がっていた。その傾向は、被虐待群により顕著に見られた。

「親友との相談」に関する交互作用グラフ

図 2:調査機関×学年

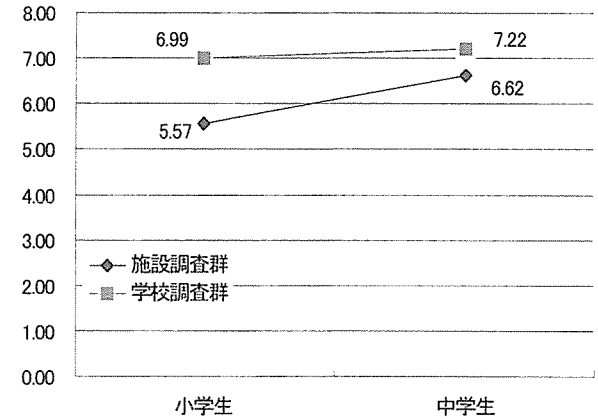
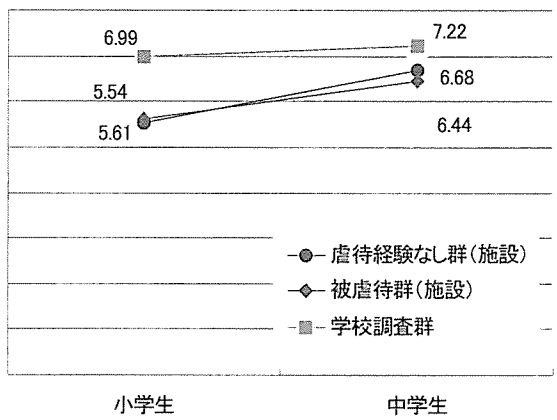


図 7:虐待経験有無×学年



学校調査群の子どもは、小中学生でほぼ変わらず、親友との関係を相談し合う間柄であると認識していたが、施設調査群では小学生から中学生にかけてその認識が強まり、学校調査群に近づいていくと考えられる。

「親友との相互尊重」に関する交互作用グラフ

図 3:調査機関×学年

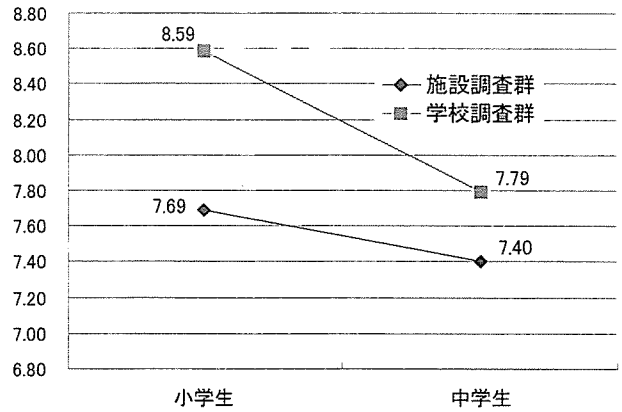
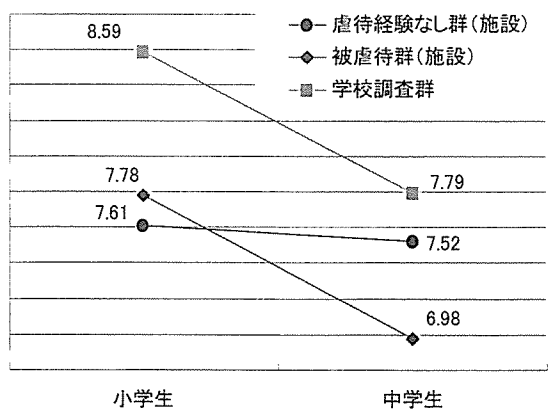


図 8:虐待経験有無×学年



学校調査群の子どもの結果から、小学生よりも中学生の方が親友との相互尊重得点が低くなることがわかった。これは、中学生での親友関係が、単なる“仲良し”から、お互いに自立した個人同士の対等な関係性へと成熟することを示しているかもしれない。この親友関係の成熟の観点にたてば、施設調査群の親友関係は、小学生の段階からすでに“仲の良さ”重視のものではないといえるかもしれない。

「親友とのけんか」に関する交互作用グラフ

図 4:調査機関×学年

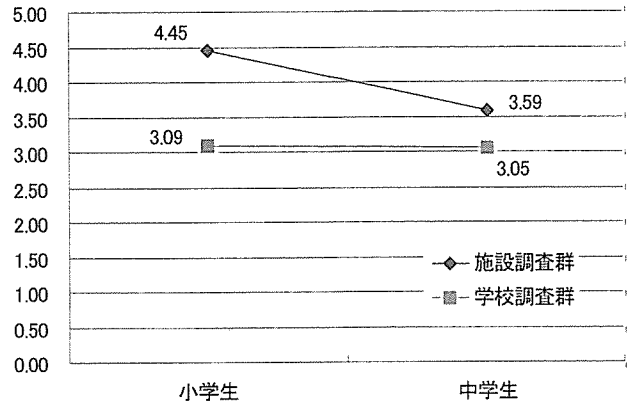
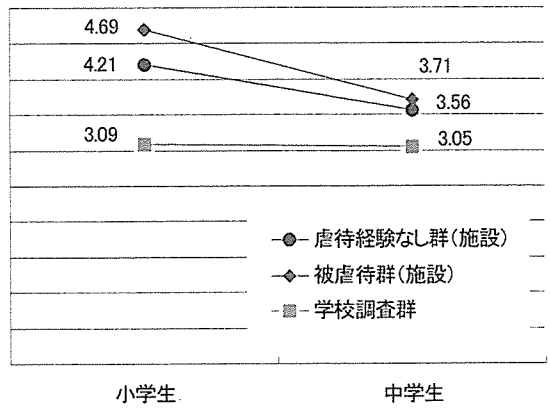


図 9:虐待経験有無×学年



学校調査群の子どもは、小中学生ではほぼ変わらず、親友とけんかすることが少なかった。
施設調査群（とくに被虐待群）では小学生から中学生にかけて親友とけんかする傾向が弱まり、学校調査群に近づいていくと考えられる。

「親友との時間共有」に関する交互作用グラフ

図 5:調査機関×学年

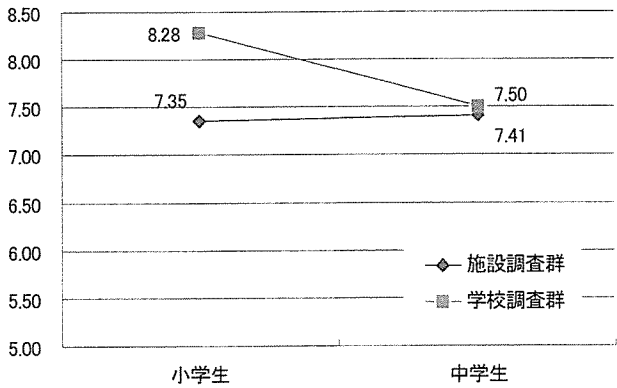
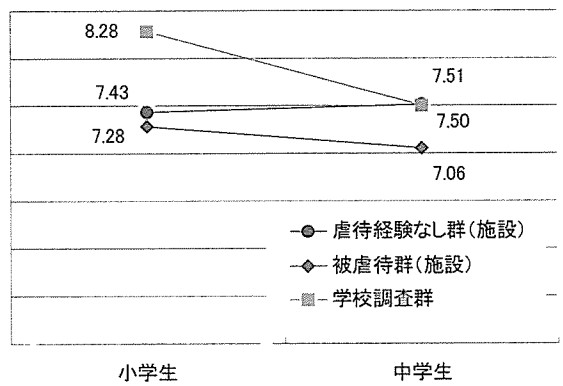


図 10:虐待経験有無×学年



学校調査群の子どもの結果から、小学生よりも中学生の方が親友と一緒に過ごす傾向が弱まることがわかった。この結果も、「親友との相互尊重」と同様に、中学生での親友関係が、単なる“仲良し”から、お互いに自立した個人同士の対等な関係性へと成熟することを示しているかもしれない。この親友関係の成熟の観点にたてば、施設調査群の親友関係は、小学生の段階からすでに“仲の良さ”重視のものではないといえるかもしれない。

3群間における学校内外の友人の数の比較

図 11:学校内の友人数

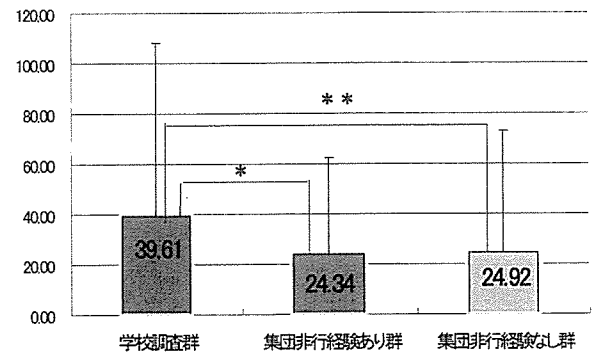
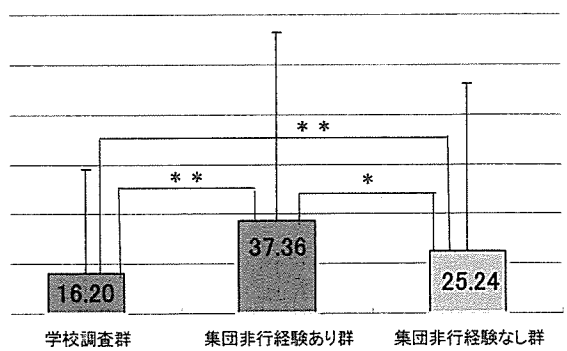


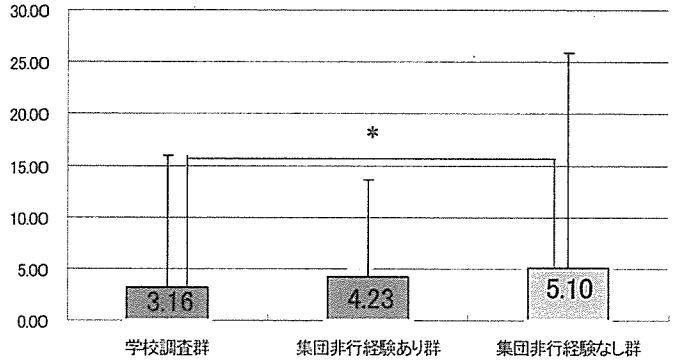
図 12:学校外の友人数



学校内の友人数は、2つの施設調査群よりも学校調査群に多かった。
一方、学校外の友人数は施設調査群の方が学校調査群より多く、なかでも集団非行経験あり群が最も多かった。

3群間における学校外の親友の数の比較

図 13:学校外の親友数



3群間における親友との「相談」および「時間共有」の得点比較

図 14:親友との相談

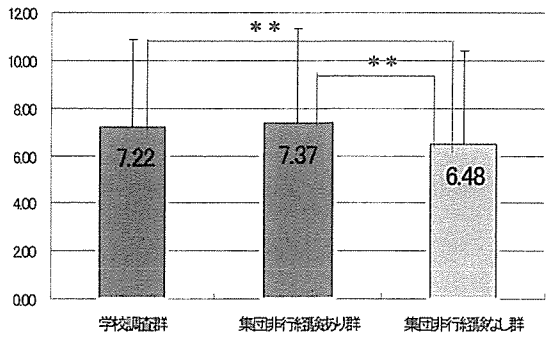
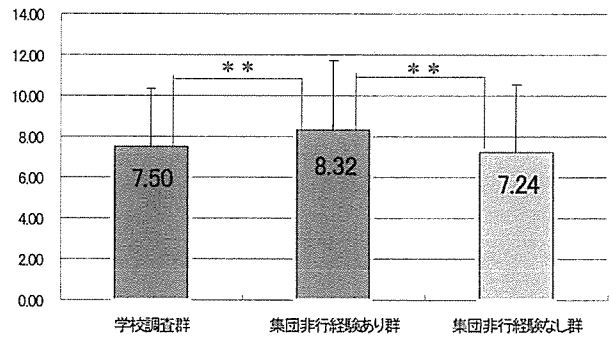


図 15:親友との時間共有



集団非行経験あり群は、学校調査群と同様に、集団非行経験なし群に比べて親友との関係を相談し合う間柄であると認識していた。また、集団非行経験あり群は、他の2群よりも親友と一緒に過ごすことが多いことがわかった。

3群間における親友との「相互尊重」および「けんか」の得点比較

図 16:親友との相互尊重

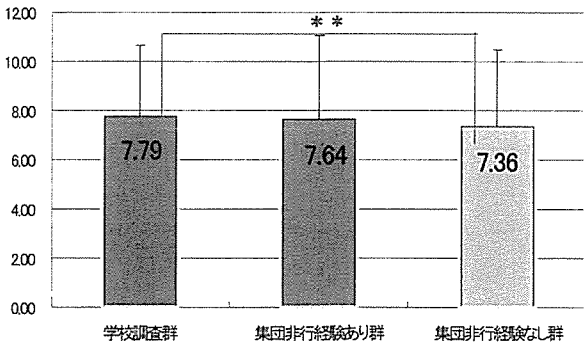
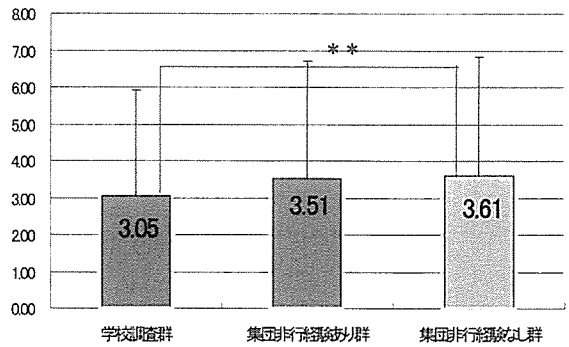


図 17:親友とのけんか



集団非行経験なし群が、学校調査群に比べて親友と互いに尊重しあうことが少なくけんかが多いのに対して、集団非行経験あり群は他の2群との間に差は認められなかった。

厚生労働科学研究費補助金
総合研究報告書

要保護児童における家庭・地域環境要因の特徴

－子ども家庭総合評価票による児童福祉機関調査から－

○松本聡子[1]・菅原ますみ[1]・酒井厚[2]・伊藤教子[3]
([1]お茶の水女子大学・[2]山梨大学・[3]明星大学)

Key words: 住環境，要保護児童，被虐待経験

目　的

本研究では児童福祉機関を訪れる要保護の子ども（0～18歳未満）の発達保障に関する科学的かつエビデンス・ベースドなアプローチを可能にするために開発された発達の状況と環境要因に関する評価票（“子ども家庭総合評価票”,菅原, 2005）を用いて実施された児童福祉機関を対象とした調査の結果から，要保護児童の出自家庭が居住する家庭・地域環境要因の特徴の把握，およびこれらの特徴の被虐待経験の有無による違いについて検討をおこなった.

先行研究の結果から，子どもたちの様々な心身の機能不全や発達の遅れの出現には，1. 子ども自身の生物学的・心理学的な要因，2. 家族関係やケアの供給，住環境などに関する家族要因，3. 保育所・幼稚園・小学校・中学校などの家庭外の養育･教育機関や子育てや教育をめぐる地域特性の要因など，様々な範囲の要因が関わっていることが知られてきている. イギリス保健省による子どもに関する福祉・保健・教育のあらゆる場面に共通するアセスメントシステムにおいては，子どもが生活する住環境について組織的に評価することが提案されている. このような知見に基づき“子ども家庭総合評価票”においても，アセスメントの対象となる子どもの出自家庭が生活していた住環境（住居の様子，地域環境の様子）について評価する項目が含まれている. 本研究では，要保護児童がこのような住環境の側面についてどのような特徴を有するか，さらに被虐待ケースと養育者からの虐待事実が確認されなかったケースとでは，こうした住環境の側面についてどのような違いが見られるかについて検討をおこなった結果について報告する.

方　法

全国の主要児童相談所および児童福祉施設に対して，5つの年齢版（乳児期版・幼児期版・児童期版・思春期版・青年期版）の子ども家庭総合評価票を郵送により配布・回収をおこなった. 回収された総ケース数は乳児期版（187 ケース），幼児期版（171 ケース），児童期版（169 ケース），思春期版（249 ケース），青年期版（189 ケース）である. これらのうち，回答が有効であった 961 ケースを本研究での分析対象とした.

上記の対象ケースについて家庭に関する項目（3 項目）・地域環境に関する項目（4 項目）について評価をしてもらった.

結　果

対象となった要保護児童の出自家庭が生活している家庭および地域環境の状況に関する評価の結果を以下に示す. さらに，これらの特徴が被虐待経験の有無によって異なるかどうかを t 検定によって検討した.

《住居内の様子について》

1. 住居内は清潔に保たれていなくて，汚い感じがする
   はい（95 人・9.9%），ややはい（86 人・8.9%），ややいいえ（72 人・7.5%），いいえ（221 人・23.0%），判断困難／無回答（487 人・50.7%）
2. 住居内はひどく乱雑で落ち着きがない
   はい（66 人・6.9%），ややはい（88 人・9.2%），ややいいえ（79 人・8.2%），いいえ（242 人・25.2%），判断困難／無回答（486 人・50.6%）
3. そうじや庭の手入れはほとんどしていない
   はい（58 人・6.0%），ややはい（78 人・8.1%），ややいいえ（69 人・7.2%），いいえ（248 人・25.8%），判断困難／無回答（507 人・52.8%）

《地域環境の様子について》

1. 対象家族の地域交流（近所付き合い）
   乏しい（孤立している）（213 人・22.2%），やや乏しい（146 人・15.2%），時々交流している（108 人・11.2%），活発に交流（27 人・2.8%），判断困難／無回答（467 人・48.6%）
2. 対象家族の近隣トラブル
   現在近隣と大きなトラブルを起こしている（15 人・1.6%），現在近隣と小さなトラブルがある（58 人・6.0%），以前トラブルがあったが今はない（56 人・5.8%），近隣とのトラブルはない（202 人・21.1%），判断困難／無回答（628 人・65.5%）
3. 対象の子どもの同年齢児童との交流
   近隣に子どもがいなくて交流できない（32 人・3.3%），いるが交流していない（133 人・13.8%），時々交流している（148 人・4.6%），活発に交流している（44 人・15.4%），判断困難／無回答（604 人・62.9%）
4. 安全性（交通面，防犯性）
   危険（12 人・1.2%），やや危険（68 人・7.1%），比較的安全（255 人・26.5%），安全（118 人・12.3%），判断困難／無回答（508 人・52.9%）

《被虐待経験の有無による違い》

各項目について，“判断困難”としていたケースは除いて t 検定を行ったところ，“住居内は清潔に保たれていなくて，汚い感じがする”（$p<.05$），“住居内はひどく乱雑で落ち着きがない”（$p<.05$），“そうじや庭の手入れはほとんどしていない”（$p<.01$），“対象家族の地域交流（近所付き合い）”（$p<.01$），“対象家族の近隣トラブル”（$p<.01$）の 5 項目において，いずれも被虐待経験のある子どもたちの方が有意に点数が高い（＝注意を要する状況である）ことが示された.

考　察

要保護児童の出自家庭が生活している家庭の様子や地域環境の様子については，判断困難とする評価が大半を占めていたものの，全体としては家庭内については比較的良い評価となっていた. 一方，地域環境については，地域における交流が“乏しい”・“やや乏しい”を合計すると，評価できたケースのうちのおよそ 7 割に及ぶことが明らかになり，要保護児童の家庭が地域社会から孤立している傾向があることが示唆された. また，被虐待経験の有無によって，住居を清潔に保つことや，地域社会との関わり方が異なっていることが明らかとなった.

引用文献　菅原ますみ (2005)『子どもと家庭を対象とした総合評価票の開発に関する研究』厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

要保護児童における家庭・地域環境要因の特徴

ー子ども家庭総合評価票による児童福祉機関調査から(2)ー

○松本聡子[1]・菅原ますみ[1]・酒井厚[2]・伊藤教子[3]
([1]お茶の水女子大学・[2]山梨大学・[3]明星大学)

Key words: 住環境, 要保護児童, 被虐待経験

研究の背景

子どもの実態把握・評価(アセスメント)における
家庭・地域環境要因の位置づけ

↓

ENVIRONMENTAL VULNERABILITY
(環境の脆弱さ)

- 【生活水準】の一つの指標としての家庭・地域環境
- 【生活のようす】の一つの指標としての家庭・地域環境
- 実態把握・評価ポイント
  家庭や地域環境の…
  - ＊清潔さ
  - ＊物理的ニーズの適切さ(充実度)
  - ＊子ども・家族と地域社会の関わり
  - ＊安全性・治安

目 的

- 要保護児童の出自家庭の居住する家庭・地域環境は, どのような特徴をもっているのだろうか.
- 虐待経験の有無によって, 居住する家庭・地域環境要因に違いはみられるのだろうか.

対 象

- 対象施設: 全国の主要児童相談所および児童福祉施設
- 「子ども家庭総合評価票」を郵送により配布・回収

回収数および有効回答数

	対象年齢	回収数
乳児期版	0～2歳＜	187
幼児期版	2歳～就学前	171
児童期版	小1～小4	169
思春期版	小5～中3	249
青年期	中学卒～18歳	189
有効回答数		*961*

評価項目

＜家庭環境について＞

① 住居は清潔に保たれていなくて、汚い感じがする

4. はい　3. ややはい　2. ややいいえ　1. いいえ　0. 判断困難

② 住居内はひどく乱雑で落ち着きがない

4. はい　3. ややはい　2. ややいいえ　1. いいえ　0. 判断困難

③ そうじや庭の手入れはほとんどしていない

4. はい　3. ややはい　2. ややいいえ　1. いいえ　0. 判断困難

＜地域環境について＞

① 対象家族の地域交流(近所付き合い)

4. 乏しい(孤立している　3. やや乏しい
2. 時々交流している　1. 活発に交流　0. 判断困難

② 対象家族の近隣トラブル

4. 現在近隣と大きなトラブルを起こしている
3. 現在近隣と小さなトラブルがある　2. 以前トラブルがあったが今はない
1. 近隣とのトラブルはない　0. 判断困難

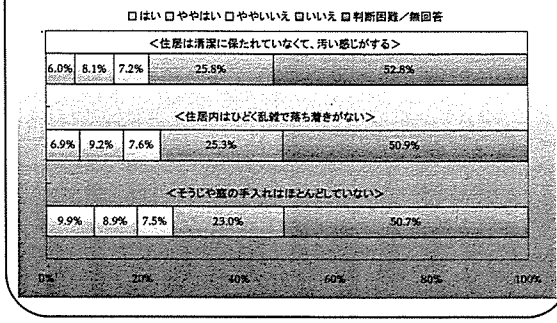
③ 対象の子どもの同年齢児童との交流

4. 近隣に子どもがいなくて交流できない　3. いるが交流していない
2. 時々交流している　1. 活発に交流している　0. 判断困難

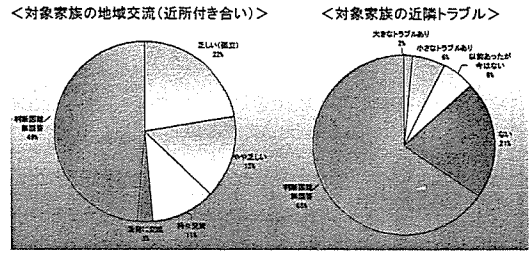
④ 安全性(交通面, 防犯性)

4. 危険　3. やや危険　2. 比較的安全　1. 安全　0. 判断困難

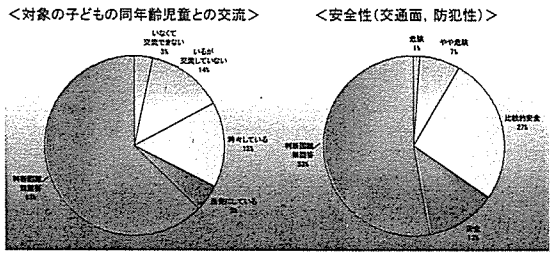
結果：要保護児童の出自家族の家庭内のようす



結果：要保護児童の出自家族の地域環境のようす①



結果：要保護児童の出自家族の地域環境のようす②



結果： 被虐待経験の有無による違い

	被虐待経験あり			被虐待経験なし			
	N	*Mean*	*SD*	*N*	*Mean*	*SD*	
<家庭内のようす>							
■ 住居内は清潔に保たれていなくて，汚い感じがする	195	2.25	1.21	279	2.02	1.19	*
■ 住居内はひどく乱雑で落ち着きがない	196	2.11	1.16	279	1.85	1.08	*
■ そうじや庭の手入れはほとんどしていない	181	2.08	1.14	272	1.75	1.06	**
<地域社会のようす>							
■ 対象家族の地域交流（近所付き合い）	206	3.43	0.77	288	2.87	0.96	**
■ 対象家族の近隣トラブル	136	1.92	0.98	195	1.47	0.83	**
■ 対象の子どもの同年齢児童との交流	146	2.48	0.88	211	2.39	0.78	*n.s.*
■ 安全性（交通面，防犯性）	182	1.98	0.71	271	1.92	0.72	*n.s.*

* $p<.01$; ** $p<.05$

考察

■ 対象児童の家庭・地域環境のようすについては，情報収集が困難

- "判断困難"や"無回答"が回答の大半を占める（7項目の平均＝54.9%）

特に…

✓対象家族が隣近所とトラブルがあるか（判断困難／無回答＝65%）

✓対象児童が地域の同年齢児童と交流しているか（判断困難／無回答＝63%）

…については，情報を収集するのが困難

■ 対象児童の出自家庭の"家庭内のようす"は，概ね肯定的な評価であった

- 肯定的な評価の割合[注]
  清潔さ：75%　落ち着き：67%　そうじ・庭の手入れ：62%

注）肯定的な評価の割合とは，各設問に対する回答（判断困難／無回答は除く）のうち，"いいえ"と"ややいいえ"の割合を指す．

■ 対象児童の家庭は地域社会との関係性が希薄な傾向がみられた

- 交流が"乏しい"または"やや乏しい"と回答した割合[注]
  家族と地域社会の交流：75%
  対象児童と同年齢児童との交流：67%

注）判断困難／無回答は除く．

■被虐待経験の有無によって，家庭や地域環境要因に違いが見られた

		被虐待経験のないケースと比較して，被虐待経験のあるケースは：
＜家庭内の様子＞	✓清潔さ ✓落ち着き ✓そうじ・庭の手入れ	そうじや庭の手入れなどにより，家庭内を清潔に保つことに対する評価が低い．また，落ち着きのない雰囲気の家庭である傾向がみられる．
＜地域環境の様子＞	✓地域社会との交流 ✓近隣とのトラブル	被虐待経験のないケースと比較して，近所づきあいが乏しく，トラブルを経験している場合が多い．

Ⅲ. 子どもの健康と発達に関する尺度標準値設定の試み

（1） 子ども期の問題行動と精神症状に関する尺度

：“Strength and Difficult Questionnaire”

（2） 発達課題に沿った尺度

：“乳幼児期の愛着尺度”

：“児童期以降の自己評価尺度”

厚生労働科学研究費補助金
総合研究報告書

厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)
要保護児童のための児童自立支援計画ガイドラインの活用と評価に関する研究
(主任研究者　菅原ますみ)

Ⅱ．子どもの心理的発達と精神的健康度に関する尺度の開発と全国標準値の設定

主任研究者　菅原ますみ(お茶の水女子大学大学院・人間文化研究科)
分担研究者　酒井厚（山梨大学教育人間科学部)、相澤仁（国立きぬ川学院)、
松本聡子（お茶の水女子大学文教育学部)、
戸田まり(北海道教育大学札幌校)、

要旨：　平成 17 年度・18 年度の 2 年度を通じて、自立支援計画の策定にあたって子ども自身が抱える問題性の程度をケースごとに把握するために特に重要と考えられる心理的発達と精神的健康に関する諸尺度：①子どもの精神的健康に関する尺度（Strength and Difficult Questionnaire 日本語版、3－4 歳用養育者/教師評定版・4－16 歳用養育者/教師評定版、付録参照)、②養育者との愛着関係尺度、③自己評価尺度の開発および検討をおこなった。これらの尺度に関して、年齢相当標準値設定のための全国調査：0 歳～18 歳までを対象、施設群・一般人口群両者を合わせ、教師等担当専門職記入版 8,908 部（0 歳～18 歳)、親記入版 1,932 部（未就学児)、子ども自記入版 11,575 部（小学校 4 年生以上）を完了し、標準値表を完成した。

1．研究の目的

支援の対象となる 0～18 歳までの子どもの心理的な発達と精神的健康に関する現況を把握するための主要なアセスメント尺度の開発をおこない、個々のケースを特徴付けるための全国標準値の設定をおこなうことを目的として 2 年間の調査研究が実施された。

今回開発の対象としたのは、子どもの心理的な発達と精神的健康の健全維持にとって重要とされる発達諸課題 (developmental tasks, Cummings, Davies & Campbell, 2002) に関連するものとして、乳幼児期では養育者（親、担当保育者）との関係性形成の安定度を測定する愛着尺度 (Attachment Scale for Infants and Preschoolers)、児童期以降では自分に対する価値感や受容感を内容とする自己評価尺度 (Harter, 1974; 真栄城他、2007) の 2 尺度を取り上げることとした。また、精神症状と問題行動に関しては、幼児期～青年期まで共通した項目内容で多側面の行動上の問題（多動と注意の問題、行為の問題、情緒の問題、友人関係の問題、向社会的行動傾向）を簡便に測定することができる Strength and Difficult Questionnaire の日本語版（“子どもの強さと困難さアンケート”、付録 1 参照）を開発して日本の子どもたちの標準値を得ること、児童期後半から思春期を対象としたうつ病のスクリーニング尺度である Child Self-Rating Depression Scale　(CSRDS, Birleson, 1996、伝田, 2002, 菅原他, 2004）の標準値を得ることを目的とした。

2．方　法

（1）対象者

調査は全国の児童福祉諸施設（乳児院、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立

支援施設）に入所中の0～18歳までの子どもたちと担当指導員、および同じく全国各地の保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校に在籍中の子どもとその親（就学前児童のみ）および担任教員を対象として実施された（詳細は、菅原，平成18年度総括研究報告書参照）。本報告では、（1）SDQ、（2）愛着尺度、（3）自己評価尺度、（4）CSRDSの各尺度ごとに、① 全サンプルの1歳ごとの全体・年齢別・性別の平均値、② 施設群と一般保育・教育機関群別の年齢・性別平均値　について報告していく。

【一般教育機関を対象とした全国調査：平成17年度・18年度】

実施方法：1）学校調査　全国を10ブロック（北海道，東北，関東，北陸，東海，近畿，中国，四国，九州，沖縄）に分け，各ブロックから1都道府県を選び，教育委員会に各都道府県内の学校での調査実施を依頼した．その結果，応諾のあった8県1道（北海道・愛知県・愛媛県・長崎県・山梨県・沖縄県・宮城県・茨城県・長野県）について，教育委員会から紹介のあった県内の小学校・中学校・高等学校（都市部と農山漁村部を各1校ずつ）を対象に調査を実施した。東京都については，都内の全公立小学校・中学校・高等学校からランダムに学校を抽出（小学校：200校，中学校：200校，高等学校：100校）して調査を依頼し、応諾の得られた小学校3校，中学校3校，高等学校4校を対象として調査を実施した。

調査内容：調査票は，小学校低学年版，小学校高学年版，中学校版，高校生版を作成した．このうち，小学校高学年版・中学校版・高校生版については，子ども自身が記入するもの（生徒用）と，担任の教師が記入するもの（教師用）の2つのバージョンがある．さらに，中学生と高校生については，生徒用のみ内容の異なる3つのバージョンを作成した（中学生版，高校生版，中学生・高校生共通版）．

実施時期：2006年2月～2007年12月

各バージョンの回収部数をTable 1に示した．

Table 1 全国調査の回収部数

＜全国一般学校調査＞

	生徒自記入版					保護者記入版		担当教員版			
	小学校高学年	中学生	高校生	中高生版		乳児版	幼児版	小学校低学年	小学校高学年	中学生	高校生
				中学生	高校生						
計	2,525	787	4,379	488	801	714	1,218	887	824	412	813
小計	8,980					1,932		2,936			
総計	13,848										

＜全国児童福祉施設調査＞

	生徒自記入版					担当者記入版							
	小学校高学年		中学生		中学校卒業以上	0･1歳版	2歳版	3歳版	4･5歳版	小学校低学年	小学校高学年	中学生	中学校卒業以上
	A版	B版	A版	B版									
乳児院						1,672	561	3					
情緒障害児短期治療施設	72	78	239		48						174	269	61
児童自立支援施設	46	28		551	138						75	548	142
児童養護施設	302	220	303	158	412			205	469	725	527	130	411
	746		1,251		598	2,910				1,501		947	614
小計	2,595					5,972							
総計	8,567												

2）未就学児調査

1. 保育所：全国の私立保育所からランダムに 300 か所を抽出し，調査を依頼した結果, 39 か所で調査実施の応諾が得られた.
2. 幼稚園：東京都の全公立幼稚園からランダムに園を抽出し, 100 園に調査を依頼して計 9 園から調査実施の応諾が得られた.
3. 子ども家庭支援センター：東京都に設置されている子ども家庭支援センター60 か所に調査を依頼し，17 か所から調査実施の応諾が得られた.

調査内容：質問紙は，乳児版（0～2 歳 11 か月まで)，幼児版（3～6 歳 11 か月まで）を作成した.

実施時期：2007 年 2～3 月

3．結果および考察

（1） Strength and Difficult Questionnaire (SDQ、“子どもの強さと困難さアンケート”) 日本語版の開発と標準値の設定について：

SDQ は約 3 歳から 16 歳頃までの子どもの精神症状項目群と肯定的な行動特徴（向社会性)に関する項目群の合計 25 項目から構成された簡便な問題行動に関するスクリーニング尺度である (Goodman et al., 1998)。Child Behavior Checklist (CBCL, Achenbach & Edelbrock, 1991) などの従来の代表的な子ども期の問題行動に関する包括的な測定尺度は比較的信頼性や妥当性の高い尺度特性を有するものの、いずれも項目数が多く（例えば、CBCL の 4－18 歳版は 113 項目）研究や実践の場で簡便に利用することが困難であった。この点を改良し、SDQ は 5 項目構成の 5 つの下位尺度計25項目で5分程度で記入可能な簡便さを備えている。SDQ の妥当性（精神障害群の識別性や CBCL, Rutter Scale との相関など、Goodman et al., 1999; van Widenfelt et al., 2003 など)に関する多くの研究が既に欧米において実施されてきており、62 言語の翻訳版が作成され、イギリス、ドイツ、アメリカ、ノルウェー、フィンランド、オランダ、ルーマニアなどでは大規模な研究が実施されてきている（http://www.sdqinfo.com/)。

＜SDQ25 項目の 5 つの下位尺度＞

① emotional symptoms（5 項目）
: 抑うつや不安などの情緒の問題
② conduct problems （5 項目）
: 反抗挑戦性や反社会的行動に関する行為の問題
③ hyperactivity/ inattention（5 項目）
: 不注意や集中力の欠如、多動性に関する多動と注意の問題
④ peer relationship problems （5 項目）
: 友人からの孤立や不人気などの友人関係の問題)
⑤ prosocial behavior（5 項目）
: 協調性や共感性などの向社会的行動傾向)

＜日本語版作成の手続き＞

SDQ 全バージョンについて、原作者である Dr. Robert Goodman に許諾と翻訳作業への参加を得たうえで、2 名のバイリンガルの研究者によるバックトランスレーションを経て表 1～　の日本語版が完成した。本尺度は原作者による SDQ のホームページに公開掲載されている (http://www.sdqinfo.com/)。

1）日本語版 SDQ の領域別標準値

表 1 ～表 16 および図 1 ～図 16 に 3 歳から 18 歳までの 1 歳ごとの SDQ 領域平均得点を示した。算出した SDQ の得点は以下の 6 種類である：① EMOTION（情緒の問題 5 項目）② CONDUCT(行為の問題 5 項目)③ HYPER（多動と注意欠陥の問題 5 項目）④ PEER（友人関係の問題 5 項目）⑤ PROSOCIAL（向社会性 5 項目）⑥ PROBLEM （情緒の問題＋行為の問題＋多動と注意欠陥の問題＋友人関係の問題、４つの問題行動傾向得点の総合点)。なお、25 項目の項目ごとの平均得点については平成 18 年度総括研究報告書を参照されたい。

表１　3-4 歳養育者評定版 SDQ の領域別得点　：　3 歳
（全体：N=286,および施設別の平均値）

SDQ領域別得点（3歳）

	全体									子ども家庭支援センター								
	全体			男児			女児			全体			男児			女児		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
EMOTION	286	1.88	1.7	161	1.65	1.62	125	2.18	1.76	18	1.94	1.89	9	1.33	1.94	9	2.56	1.74
CONDUCT	286	3.38	2.19	162	3.51	2.18	124	3.23	2.2	18	3.06	2.24	9	4.11	2.52	9	2	1.32
HYPER	287	4.45	2.41	163	4.6	2.32	124	4.26	2.5	18	3.39	2.2	9	4	1.58	9	2.78	2.64
PEER	283	2.36	1.81	160	2.29	1.76	123	2.46	1.89	18	1.72	1.53	9	1.56	1.13	9	1.89	1.9
PROSOC	283	5.17	2.35	160	4.89	2.44	123	5.53	2.2	18	6.44	1.62	9	5.78	1.48	9	7.11	1.54
PROBLEM	276	12.01	5.57	157	11.96	5.35	119	12.09	5.87	18	10.11	4.6	9	11	4.39	9	9.22	4.89

	保育所									児童養護施設								
	全体			男児			女児			全体			男児			女児		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
EMOTION	117	1.64	1.58	68	1.5	1.68	49	1.84	1.43	147	2.1	1.76	82	1.8	1.56	65	2.46	1.94
CONDUCT	118	3.13	1.95	69	3.14	1.88	49	3.1	2.06	146	3.68	2.34	82	3.8	2.33	64	3.52	2.36
HYPER	118	3.76	2.12	69	4.07	2.04	49	3.33	2.18	147	5.16	2.46	83	5.13	2.52	64	5.2	2.41
PEER	118	1.58	1.39	69	1.49	1.24	49	1.69	1.58	143	3.06	1.87	80	3.06	1.86	63	3.06	1.89
PROSOC	118	6.37	1.77	69	6.22	1.9	49	6.59	1.57	143	4.08	2.28	80	3.66	2.32	63	4.62	2.12
PROBLEM	117	10.09	4.5	68	10.19	4.48	49	9.96	4.56	137	13.98	5.92	78	13.69	5.67	59	14.36	6.27

SDQ領域別得点(3歳)

	EMOTION		CONDUCT		HYPER		PEER		PROSOC		PROBLEM	
	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
センター	1.33	2.56	4.11	2	4	2.78	1.56	1.89	5.78	7.11	11	9.22
保育所	1.5	1.84	3.14	3.1	4.07	3.33	1.49	1.69	6.22	6.59	10.19	9.96
児童養護施設	1.8	2.46	3.8	3.52	5.13	5.2	3.06	3.06	3.66	4.62	13.69	14.36

図１　３歳 SDQ の領域別得点：３歳
（全体：N=286,および施設別の平均値）

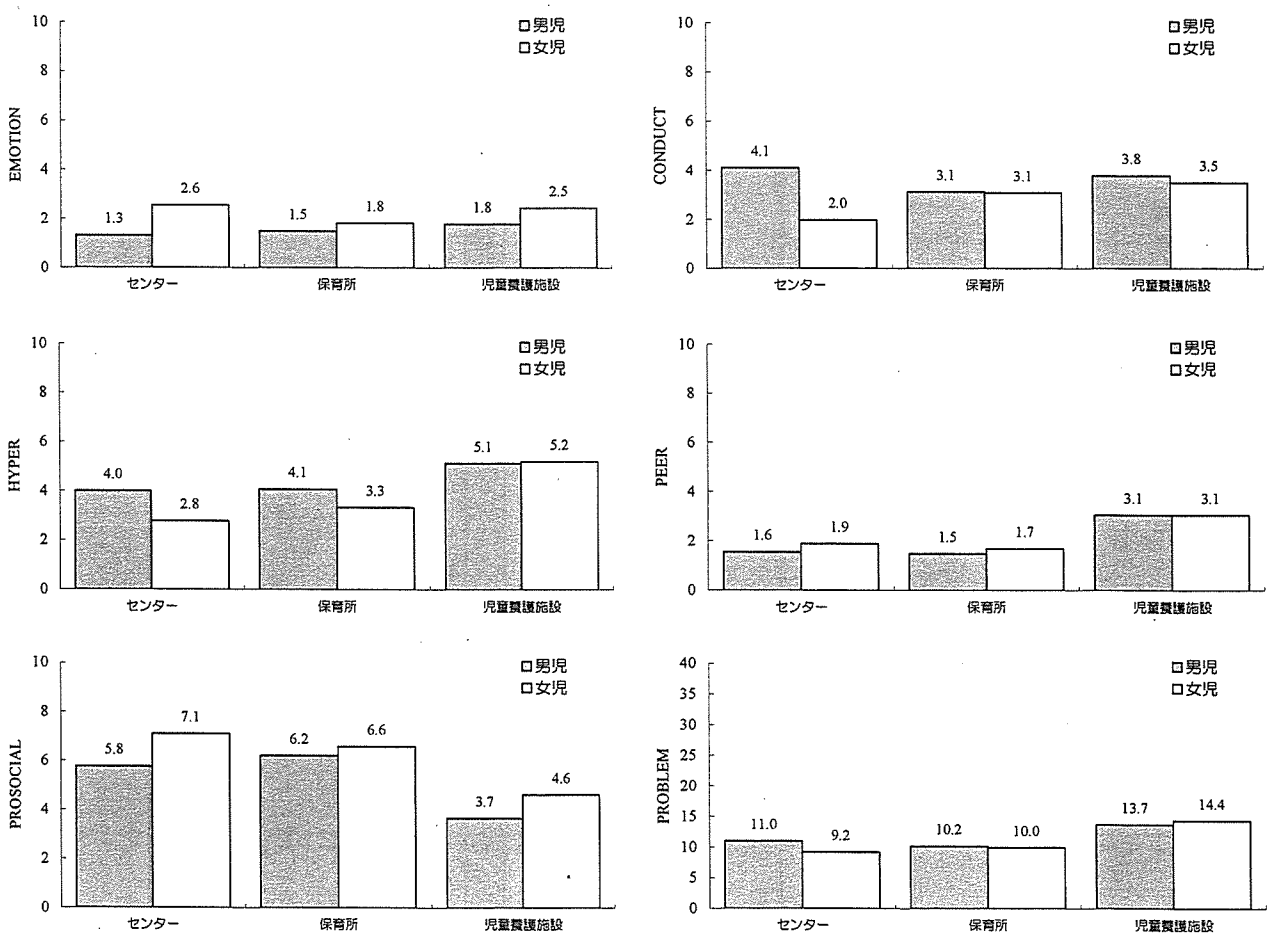


表２　3-4 歳養育者評定版 SDQ の領域別得点　：　４歳
（全体：N=420,および施設別の平均値）

SDQ領域別得点（4歳）

	全体									子ども家庭支援センター									保育所								
	全体			男児			女児			全体			男児			女児			全体			男児			女児		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
EMOTION	420	2.23	1.89	234	2.17	1.73	186	2.31	2.09	7	1.29	1.7	2	1	0	5	1.4	2.07	195	2.04	1.73	108	1.99	1.51	87	2.09	1.98
CONDUCT	421	3.35	2.18	233	3.53	2.28	188	3.12	2.04	7	2.43	1.4	2	3	1.41	5	2.2	1.48	193	3.19	1.96	105	3.21	2.07	88	3.17	1.84
HYPER	420	4.19	2.58	233	4.57	2.54	187	3.72	2.56	7	3.29	3.82	2	8.5	2.12	5	1.2	1.3	194	3.49	2.4	106	3.67	2.39	88	3.28	2.4
PEER	418	2.27	1.83	234	2.39	1.81	184	2.11	1.83	7	1.43	1.62	2	2.5	2.12	5	1	1.41	195	1.63	1.45	108	1.92	1.65	87	1.26	1.04
PROSOC	415	5.66	2.3	230	5.3	2.28	185	6.11	2.25	7	7.86	2.48	2	7	4.24	5	8.2	2.05	193	6.56	1.99	105	6.26	2.07	88	6.93	1.84
PROBLEM	409	12.02	5.87	227	12.56	5.72	182	11.34	6	7	8.43	5.38	2	15	5.66	5	5.8	2.28	190	10.31	5.14	104	10.69	5.32	86	9.84	4.91

	幼稚園									児童養護施設								
	全体			男児			女児			全体			男児			女児		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
EMOTION	21	1.57	1.43	13	1.85	1.63	8	1.13	0.99	197	2.53	2.05	111	2.41	1.92	86	2.7	2.2
CONDUCT	22	2.18	1.76	14	2.79	1.81	8	1.13	1.13	199	3.66	2.39	112	3.94	2.47	87	3.3	2.24
HYPER	22	3.05	2.5	14	3.36	2.47	8	2.5	2.62	197	5.04	2.46	111	5.51	2.28	86	4.43	2.57
PEER	22	1.82	1.5	14	2.29	1.59	8	1	0.93	194	2.99	1.94	110	2.87	1.88	84	3.15	2.02
PROSOC	22	6.09	2.14	14	5.71	2.2	8	6.75	1.98	193	4.63	2.15	109	4.3	2.05	84	5.06	2.22
PROBLEM	21	8.14	4.45	13	9.62	4.15	8	5.75	4.06	191	14.28	5.88	108	14.68	5.53	83	13.76	6.29

SDQ領域別得点（4歳）

	EMOTION		CONDUCT		HYPER		PEER		PROSOC		PROBLEM	
	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
センター	1	1.4	3	2.2	8.5	1.2	2.5	1	7	8.2	15	5.8
保育所	1.99	2.09	3.21	3.17	3.67	3.28	1.92	1.26	6.26	6.93	10.69	9.84
幼稚園	1.85	1.13	2.79	1.13	3.36	2.5	2.29	1	5.71	6.75	9.62	5.75
児童養護	2.41	2.7	3.94	3.3	5.51	4.43	2.87	3.15	4.3	5.06	14.68	13.76

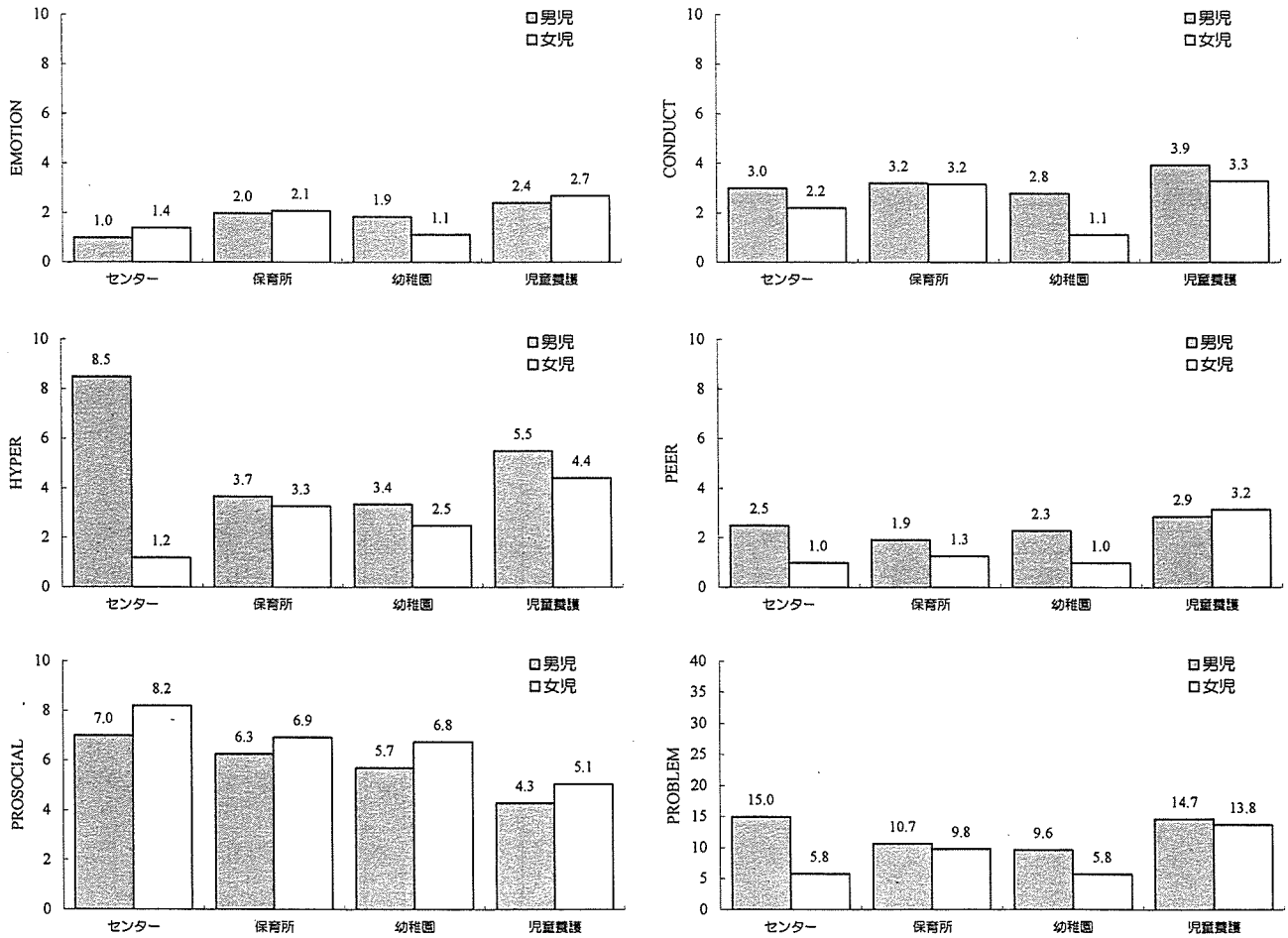



図２　４歳 SDQ の領域別得点
（全体：N=420,および施設別の平均値）